

## 2022年 夏季福音特別集会 第2回 祈り

2022年8月27日 (京都KKRくに荘)

奥田 昌道

開会の祈り 見えるものと見えないもの 生命の御霊の法 聖言によりて望をいなく  
霊と肉 大胆にキリストを告白 御霊の執り成し 財産において自我を惜しむ 無者キ  
リスト 破れ・砕け・平伏 誠と信 御意にかなう求めは必ず聴き給う 祈り

### ●開会の祈り

では、始めに黙祷していただきます。

主さま、第1回の集会を終えまして、今から第2回の集会を始めます。テーマは「祈り」  
でございます。主さま、

「我ら是如何に祈るべきか知らざれども御霊言い難き呻きをもて執成し給う」と  
あります。どうぞ、主さま、御霊なるあなたがこの場にご臨在くださいますと、一人ひ  
とりを温かく包み、担い、そして、

「生かすものは霊なり、肉は役立たず、わが汝らに語りし言は霊なり、生命  
なり」

と、その本当の霊の生命をもって我らを養い、また、

「祈りたることは既になえられたりとせよ」

と、約束してくださいました。私たちに賜った恵みは、祈ることが出来るということです。「祈  
りたることは既になえられたりとせよ」と力強く約束してくださいました。そして、

「見ずして信する者は幸いなり」  
と。また、

「望むところを確信し、見ぬ物を真実とせよ」

と、励ましてくださいました。どうか、地上のいわゆる肉の次元を乗り越えて、御霊の次元  
あなたの生き生きと生きたもう御霊の次元の中に我らを導いてくださいますように。そし  
て、御霊・御言一如になって、我々を生かshめてくださるよう。どうぞ、あなたの栄光  
を現してくださいますように。我々自身が、

「我ら主と共に既に十字架せられたり。もはや我ら生くるにあらず。キリスト  
わがうちにありて生きたもうなり」

という、そういう霊的現実をしつかりといただいて、あなたを一心に見つめて歩いて行く  
ことが出来ますように。



「我は道なり、真理なり、生命なり。我を食らい、我を飲め」と、本当にあなたの方から迫ってください、ありがとうございます。

「見ずして信する者は幸いなり」  
と。あなたの御姿は見えませんが、どうぞ、あなたのご栄光の姿を霊の目において見させてください。霊においてあなたと一つとならしめてください。この祈りを、集会を始めるにあたって、尊き主さまの御名を通して、御前にお捧げいたします。アーメン。

### ●見えるものと見えないもの

第1回の集会の時に落とした御言がありますので、それをちよつと補いたいと思います。コリント後書4章16〜18節。1回目の集会では、

「見えるものと見えないもの」ということもテーマになっていました。

「望むところを確信し、見ぬ物を真実とする」

とか、そういうことからして、コリント後書4章16節からを引きたいと思います。このコリント後書4章は素晴らしいところとして、またゆつくりと味わっていただきたいと思えます。たとえば、6節、

「6光、暗より照り出でよと宣いし神は、イエス・キリストの顔にある神の栄光を知る知識を輝かしめんために、我らの心を照し給えるなり。」

7我等この宝を土の器に有てり、これ優れて大なる能力の我等より出でずして、神より出づることの顕れんためなり。8われら四方より患難を受くれども窮せず、為ん方つくれども希望を失わず、9責めらるれども棄てられず、倒さるれども亡びず、10常にイエスの死を我らの身に負う。これイエスの生命の我らの身にあらわれん為なり。11それ我ら生ける者の常にイエスのため死に付さるるは、イエスの生命の我らの死ぬべき肉体にあらわれん為なり。」(コリント後書4・6〜11)

私たちはいろんな事にあつて、ヘトヘトになるようなことがあります。でも、今読みあげましたように、「我等この宝」は御霊だと私は思っています。あるいは御霊の生命と言ってもいい。そういう宝をこの土の器にいただいている。その「大なる能力」は我々から出るものではない。神・キリストから出てくる。そのことが現れるんだと。それ故に、

「8われら四方より患難を受くれども窮しない、為ん方つくれどもつまり八方塞がり、万事窮すという状態になつても、なお

希望を失わない、9責めらるれども棄てられず、

人は棄てようとも神は棄てたまわない。

倒されたと思つても亡びない、



起き上がる。しかも、

10常にイエスの死を我らの身に負う。

「われ主と共に十字架せられたり、もはやわれ生くるにあらず」と、イエスの死を一緒に味わっている。それは、

イエスの生命がこの身にあらわれる為である。11我ら生ける者が常に死に付わたされるは、

これはキリストのために、キリストを生きたるために、キリストを伝えることが理由となつて、迫害されたり、死の宣告を受けたりすることがあろうとも、それは逆に、

イエスの生命がこの死ぬべき肉体にあらわれるのである。」

と。少し飛んで14節、

「14これ主イエスを甦えらせ給いし者〔神さま〕の我等をもイエスと共に甦えらせ、汝らと共に立たしめ給うことを我ら知ればなり。」

パウロとその一味の方々とこのコリントの信者たちに向かつて言っているわけですね。

15凡ての事は汝らの益なり。これ多くの人によりて御恵みめぐみの増し加わり、感謝いや増りまさて神の栄光の顕れん為なり。

どんなことがあつても、それは神の栄光が、キリストの栄光が顕れるんだと。皆さんはいろんな不如意なことに会われると思います。でも、何があつたつてビクともしない。人から見たら、

「キリストを信じて、あれだけ一生懸命にやっている人がなぜ、あんな酷いひど目にあうのだろうか」

と、そう思うかもしれない。そんなことでビクともするようなことではないよと。そういった意気盛んな姿がここに描かれていますね。

「為せん方せつくれども希望のぞみを失わず」

と。「万事窮す」といつたつて決してへこたれない。望みを失わない。それも、

「われ主と共に十字架せられたり、もはやわれ生くるにあらず。キリストわがうちにありて生きたもうなり」

これをパウロは生きているから、こういう言葉が出てくるのだと思います。そして終わりのところで、

16この故に我らは落胆きおちせず、我らが外なる人は壊やぶれるれども、内なる人は日々あたらに新あらたなり。17それ我らが受くる暫しばらくの軽なやみき患難は、極めて大おおなる永遠とこしえの重おもきは、光栄を得しむるなり。

我らは落胆しない。たとえ外なる人、肉体がガタガタになろうとも、内なる人、霊なる人は日々あたらに新あらたである。いろんな患難を受けるが、これは軽い患難である。我々が受けるのは永遠の重い光栄、そういう将来我々が受ける光栄に比べたら、現在の苦難なんていうの



は問題ではないと。そして締めくくりとして、

18 我らの顧みる所は見ゆる者にあらで見えぬ者なればなり。見ゆる者は暫時しばらくにして、見えぬ者は永遠とこしえに至るなり。」(コリント後4・14〜18)

見える者は一時的だ、見えない者こそが永遠に至るのだと。だから、第1回集会で、

「望むところを確信し、見ぬ物を真実まこととする」(ヘブル11・1)

ということと繋がっている箇所だと思えますので、今、補充することにしたしました。

「我らの顧みる所は見ゆる者にあらで見えぬ者である。見える者は暫時しばらくだ、見えない者こそ永遠に至るのだ。」

と。そして、5章では、我々の地上の生命が終わった後のことが描かれています、それは今は省いておきます。

### ● 生命の御霊の法

それで、第2回の集会「祈り」ということになります。ここに「祈り」に関する御言を列挙しました。御言を全部プリントに書くとは枚にもなりますので、箇所だけをこうやってまとめました。一つ一つ聖書で見たいと思います。

それでは、ローマ書8章26〜30節をまず見ましょう。ローマ書8章というのは、このローマ書の中においてもピークなんです。ローマ書自体が素晴らしい書簡ですけども、その中のまたピークがこの8章です。8章の始めから見たいこうと思います。

「この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。」

「この故に」というのは、7章の

「<sup>24</sup>噫あゝわれ悩める人なるかな、此この死からだの体より我を救わん者は誰ぞ。」

そういう嘆きを発して、しかしながら、

<sup>25</sup>我らの主イエス・キリストに頼りて神に感謝す」(ロマ7・24〜25)

と。そして、

「この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定められることがない。」

断罪されない。なぜならば、

<sup>2</sup>キリスト・イエスに在る生命いのちの御霊みたまの法のりは、なんじを罪と死との法より解放ときはなしたればなり。」(ロマ8・1〜2)

この8章では、「霊と肉」ということが盛んに出てきます。生まれながらの我々の姿は「肉」とよばれています。それは中心が「エゴ」なんです。自我ごが中心を占めますから、それを「肉」とよびます。その肉は「罪」というものと繋がっていくわけです。自我を主張しますから罪なんです。それに対して、「霊」は神・キリストの次元です。キリストはヨハネ伝6章で、

「活かすものは霊であつて、肉は役に立たない。私が語つた言葉は霊であり生命だ



よ  
と仰った。ヨハネ伝6章63節。それをいつも思ってください。ここで、  
「キリスト・イエスに在る者はもう罪に定められることはありえない」  
なぜならば、

「キリスト・イエスに在る生命の御霊の法があなたを罪と死との法から解き放  
つからである」

小池先生はこの1節の「今やキリスト・イエスに在る者は」を、

「今やキリスト・イエスに在らしめられて在る者は」

と読んでくださいますと言われた。我々がひとりだにキリストの中にある、これは無理ですよ。そうはいきません。キリスト・イエスがご自分で我々の罪を全部背負いきって、神の子にしてくださいました、神に相應しい者にしてくださった。そのようなキリスト・イエスのゆえに、キリストの中に在らしめられて在る。キリストが抱き取ってくださいました。そういう我々であるからこそ、もはや断罪されるということはない。そういう我々の中に働く法則は何か、霊的法則は何かというのと、もはや罪の法則、死の法則ではない。

「生命の御霊の法」

だという。生命の御霊の法に導かれていく。それがこの8章でまず言われている。なかなか難しいことが書かれていますけれども、要するに、「肉に在る」、つまり生まれながらの自我の姿である場合は、絶対に神さまに喜んでもらうわけにいかない。神は霊ですから。

「神は霊なれば、拝する者も霊と真とをもつて拝すべし」

と、イエスは仰った。そのように、神さまとつながろうと思ったら、霊の次元に居らせてもらわないといかん。

「霊の次元」と言いますが、いろんな次元がありますから、悪霊も霊の次元です。そんなものに捕まったら大変です。「生命の御霊の法」、キリストの霊をいただいて、そしてキリスト・イエスの中に抱き取られてある者はもはや断罪されることはありえない。それはみなキリストがなさってくださいましたんです。キリストが十字架で我々の罪を全部贖って、無罪宣言をしてくれました。そして、無罪で放りっぱなしではない。

十字架でゼロにされました。ゼロのまま放っておいたら、また悪霊が来るかもしれない。だから、ゼロになった真空地帯に即、聖霊が宿ってください。「十字架と聖霊」はワンセットなんです。十字架で旧き我は死んだ。新しき我は、あとは誰が導いてくれるの？ 新しき我はどんな霊をいただいて生きるの？ 真空地帯なら危ないですから、十字架の贖いの直ぐ後には聖霊という「生命の御霊」が宿ってください。そのお方が私たちを本当に生命の世界へと限りなく導いてくださるわけです。それがあのパウロの告白、

「われ主と共に十字架せられたり。もはやわれ生くるにあらず。御霊のキリス

トがわがうちにありて生きたもうなり」(ガラテヤ2・20)



と。あのパウロのガラテヤ書2章20節の告白、これがおよそクリスチャンと言うなら、みんなが同じ告白をしないとおかしいんですよ。

「自分がそう思うとか、思わないとか」

そういう自分の感情、フィーリングに惑わされたらダメです。それはフィーリングがよかつたら結構ですよ。けれども、そんなフィーリングがどうであろうと関係ない。御言みことばがどのように宣言している。御言が斯く言う。故に私は御言をありがたく平伏して受けとります。その御言の根本は、

「汝、既に贖われてあり。わが十字架によりてなり」

と。そうでしょ。第1回の集会で申しました。もう「旧い私ふる」はどこかへ行ってしまったんです。旧い私はすつ飛んでいる。それを「死んでいる」とか、いろんな表現がありましようよ。パウロだったら、

「われ主と共に十字架せられたり、もはやわれ生くるにあらず」

という表現になりましようしね。「旧い私」という、「旧い自我」という存在は一遍否定されなければいけない。旧い我が否定される。どこで否定されているんですか？ 十字架です。十字架で葬り去られてしまっているんです。

「われ主と共に十字架せられたり、もはやわれ生くるにあらず」

これは、おおよそクリスチャンと言うならば、みんな共通の告白なんです。それも自分で十字架に架かったのとは違う。イエスが私を抱き取って、一緒に十字架で死んでくださった。だから、「無理心中」と私は言ったんですよ。こっちは別に死にたくもなかった。ところが、キリストが、さきに私を抱き取って、一緒に十字架で死んでくださった。

十字架の後で私たちは生まれてきたんですよ。だから、キリストのあとで生まれてくる人たち——まあ古い人たちが全部背負うのはまだ話はわかりますけれども——これからずっと後に生まれてくる人の分まで全部キリストの十字架でもう片づけられた。こんなのは普通の理屈では通らないですね。けれども、過去・現在・未来、すべてを荷ないきっているのが十字架なんです。パウロは、

「十字架の言ことばは亡なぶる者には愚かであるが、信ずる我々には神の能力ちからなり」(コ

リント前1・18)

と、コリント前書1章18節の中で言ってますよ。あの「十字架の言」というのは、十字架という事実、イエスが架かっておられる十字架というあの事態。それが「亡ぶる者には愚かなり」というのは、「それを愚かとする者は亡びる」と読み替えた方がいい。あの尊い十字架、

「十字架はわがためなり」

と言って、平伏してそれを受けとる者には救いなんです。けれども、

「十字架なんか糞食らえ。あんなのは私と何の関係もないさ」



と言って嘯うそぶいている人には何の役にも立たない。そのかわり、その人たちはご自分で自分の責任をとらなければなりません。ご自分で天国へ行く自信があるならば、どうぞそのようになさったらいいい。でも、そんなのは無理ですよ。

●聖言によりて望をいまく

聖なる神の前に立てる人間は一人もいない。義なる神の前に立てる人間は一人もいない。詩篇143篇の2節に、

「<sup>2</sup>汝のしもべの審判さばきに関かつらい給うなかれ、そは生けるもの一人だに聖前みまえに

義とせらるるはなし」(詩篇143・2)

と、ここにハッキリと書かれています。

「生けるもの一人だに聖前に義とせられる者はない」

と、そういうことをここで宣言している。しかしながら、あなたにはみ赦ゆるしがある。だから、多くの人からあなたは畏かしこまれたもうのだと。要するに、

「義なる神さまの前に救われる者は一人もいない」

ということを言いました、

「しかし、あなたにはみ赦ゆるしがあるから、多くの人におそれ畏かしこまれ給うのだ」

と言いました、非常に感謝を捧げているという箇所があります。130篇に、

「<sup>1</sup>ああエホバよ、われふかき淵ふちより汝をよべり

これはどん底ですよ、そこから御名を呼んだ。

<sup>3</sup>ヤハよ主よ、なんじ若もしもろもろの不義に目をとめたまわば、誰かよく立つ

ことをえんや

もしもあなたがもろもろの不義に目をとめたならば、誰もあなたのみ前に立つことはできません。我は不義なる存在なんだからと。けれども、あなたにはみ赦ゆるしがある。

<sup>4</sup>されどなんじに赦ゆるあれば、人におそれ畏かしこまれ給うべし

赦しがある。これは十字架です。この詩篇では、キリスト以前ですから、十字架は出てきませんけれども。十字架による救いがある。だから、あなたは人におそれ畏かしこまれ給う。

<sup>5</sup>我エホバを俟望まちのぞむ、わが靈魂はまちのぞむ、我はその聖言みことばによりて望をい

まく

「望むところを確信している」ことを第1回で申しましたけれども、ここに

「<sup>1</sup>聖言みことばによりて望みをいまく」

という。

「信仰は望むところを確信し、見ぬ物を真実まこととする」

という、あの御言も、「望むところ」は、勝手に自分で望みを持つのではない。御言に基づいて、御言の裏付けがあるがゆえに望む。その望むこと、これはまだ成就していない。し



かし、それを

「既に得たり」

というふうに確信して、そして讚美していくという、そういうことを第1回で申し上げたわけです。ここにも、

「われ主を俟望む。わが靈魂はまちのぞむ。われはその聖言によりて望をいだく」

という。

6 わがたましひは衛士があしたを待つにまさり、誠に衛士が目をまつにまさりて主をまつり

「衛士」とは歩哨、番兵です。こういうのは今の人が読んでもわからないと思う。というのは、今は夜もネオンが輝いて、夜もあまり暗くありません。しかし、昔はそんなネオンも何もないでしょ。星空があれば、まだその光があるかもしれないけれども、星空がなかったとしたら、それは真つ暗闇ですよ。そういう真つ暗闇でどこから敵が現れてくるかわからない。身の危険たるや大変なものです。だから、そういう番兵、歩哨というものにとつては、早く朝になってほしいと祈っているに違いない。その番兵さんにまさつて、あなたを待ち望みますと。そこがいいんです。あなたを待ち望みますという。そして、

7 イスラエルよエホバによりて望をいだけ、そはエホバにあわれみあり、またゆたかなる救贖あり。8 エホバはイスラエルをそのもろもろの邪曲よりあがないたまわん(詩篇130・1〜8)

主によりて望みをいだけ、主にはあわれみがある、また豊かな救いがある、贖いがある。いろんな邪、罪から贖い出してくださるんだと。そういう希望を歌っている、この130篇はやっぱり素晴らしい詩篇だと思います。

### ● 霊と肉

それで、先程のローマ書8章にかえります。ここで、「霊と肉」ということを言っています。「肉」というのは自我主張です。そういう旧き我の姿、それが「肉」です。「霊」というのは、キリストの次元に生きる姿。それが「霊」です。神中心の生き方、これが霊の姿です。霊の姿で生きていたのがイエスキリス。それに対して普通の人間は肉の姿で生きる。どうしても、自己中心にならざるをえない。これも生物体として人を見たときは、自己保存本能というものは否定しようありません。自分で自分を護らなければ、誰も護つてくれないわけですから。そういう生物体としてはどうしても自己保存的な肉の存在なんだけれども、にもかかわらず、新たに生まれた存在としては霊の次元で生きる。それが我々の姿ですね。

「私に従ってきたと思う者は誰でも日々己を棄て、己が十字架を負いて我に従え」



と仰った、そういう姿ですね。この8章前半で一か所、注意すべきは、

「<sup>9</sup>然れど神の御霊<sup>みたま</sup>なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居らん、キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。」（ロマ8・9）

「神の御霊<sup>みたま</sup>があなた方の中に宿っていらっしやるなら、あなた方はもう肉の人ではなくて、霊の人なんだ。そして、キリストの御霊を持ってない者はキリスト者ではない」

という。

「キリスト者とは、キリストチャンとはどういう人ですか？」

「はい、イエスを信じている人です」

ではないんです。

「イエスを頭で信じたってダメだよ、御霊をいただいて本当の神の子にされているのが本当のキリストチャンだよ」

と。そういう言い方です、ここは。

「キリストの御霊なき者はキリスト者ではない」

という。

「<sup>10</sup>若しキリスト汝らに在<sup>いま</sup>さば、体<sup>からだ</sup>は罪によりて死にたる者なれど、霊は義によりて生命<sup>いのち</sup>に在<sup>あ</sup>らん。」

逆に、キリストがあなたの中に宿ってくださっているなら、たとえ体は死にますよ、みんな死にますよ、けれども、霊はもう生命の中にあるんだと。しかも、それだけではない。

「若しイエスを死人の中より甦<sup>よみがえ</sup>らせ給いし者の御霊なんじらの中に宿り給わば、キリスト・イエスを死人の中より甦<sup>よみがえ</sup>らせ給いし者は、汝らの中に宿りたもう御霊によりて、汝らの死ぬべき体をも活かし給わん。」（ロマ8・10）

11

「御霊が宿っていらっしやるならば、死ぬべき体までも活かしてくださいるではないか、御霊により」

と、そこまで書いてある。まさか不老不死ではないと思います。けれども、実際に御霊をいただいて、お医者さんがもう匙<sup>さし</sup>を投<sup>な</sup>げているような病気の方でも、病から癒されたというお話をよく聞きますからね。小池先生からも聞きました。脊椎カリエスで2時間も起きていることができないある女性の方に聖書の話をして手を置いて祈った。2時間くらいお話になったのかな。そうすると、その方は癒されていった。そういうことが現実にあるわけです。

### ●大胆にキリストを告白

それから、次にローマ書の続きにいけますけれども、



「<sup>12</sup>されば兄弟よ、われらは負債<sup>おいめ</sup>あれど、肉に負う者ならねば、肉に従いて活くべきにあらず。<sup>13</sup>汝等もし肉に従いて活きなば、死なん。もし霊によりて体の行為<sup>おこなひ</sup>を殺さば活くべし。」

私たちには責任がある。しかし、それは肉に対して責任を負っているのではない。肉に従って生きたら、生命はなくなってしまう。霊に従って生きなさいと。

「霊<sup>からだ</sup>によつて体の行いを殺すならば生きる」

と書いてある。そして、

<sup>14</sup>すべて神の御霊<sup>みたま</sup>に導かるる者は、これ神の子なり。」（ロマ8・12〜14）

皆さん一人ひとり、

「私は御霊に導かれていますから、神の子なんですよ」

と胸をはって仰ってください。それを聞いた人は、

「えっ、おまえみたなやつが？」

と、呆れる<sup>あき</sup>かもしれません。そしたら、しめたものです。

「あんたが呆れるようなこんなダメなやつをキリストが義人<sup>あき</sup>にしてください。キリストが神の子にしてください。だから、嬉しくてしょうがない。あなたもどうですか？」

なんて、逆に売り込んだらいい。

「いや、自分なんかキリストを告白したら、キリストの名がすたるのではないかと行って、告白なさらない方がある。逆ですよ、いけませんよ。どんな時も、

「私はキリストによつて贖<sup>あき</sup>われました。私の中にキリストが生きておられます」

と、ハッキリ告白すべきなんです。そうしたら、

「へえ、お前みたいなものが？」

と言われたら、しめたものです。

「そうだ。あなたからみれば、軽蔑の対象である、『お前みたいなやつが？』と見下される、そういう奴をこそ活かしてください。それが御霊のキリストなんや、復活のキリストなんや。私の信する神さまはそういうお方なんだ」

と。キリストは言われた、

「健やかなる者は医者<sup>あき</sup>を要せず。医者<sup>あき</sup>を必要とするのは病人ではないか。私が来たのは義人を招くためではない。罪びとを招くためにやって来た」

とハッキリ仰った。だから、私たちは人々の前でキリストを告白する時に、

「自分みたいな奴がキリストを告白して大丈夫なのか。キリストに恥をかかせることになるのではなからうか。神の栄光を汚すことになるのではなからうか」

と。そういうことは一切無用です。キリストを告白して、

「あつ、やつぱりそうでしたか。どこか違うと思ってきました」



と。これは褒められています。今度は、

「へエ、お前みたいな奴が!？」

「そうでしょ、『お前みたいな奴が』と軽蔑されるような人間をキリストは活かしてくださっているんですよ。キリストは言われた、あんたさんみたいな立派な人には用はないと。キリストが用があるのは、しがみついて助けてくれと言う人。キリストはそういう人を救おうとして来られたんですよ。私はそれで、そのゆえにこうやって今、生き生きと生きることができたんですよ」

と。どこから来てもキリストを讃える。これが我々の役目ではないですか。私は、皆さんがいろんな所でキリストを告白してほしい。ええ。恥をかってほしいんです。

「わが名のために誇られるならば、あなた方は幸いだ。栄光の御霊、汝らの上に留まらん」

とペテロ書に出きますよ。キリスト召団の方々が本当に大胆にキリストを告白してほしい。どうぞ、私はそれをお願いします。ボロクソに言われて当たり前なんです。ボロクソに言われるような者を神は活かしてくださいさるんです。

「この友が黙さば石叫ぶべし」

とキリストは言われました。だから、キリストのお弟子さんたちも、宗教家からみたら、そう立派ではなかったんでしょう。けれども、そういう者をこそ神は活かしてくださいさるということキリストは言っておられると思う。

だから、私は、キリスト召団の一人お一人が大胆にキリストを告白してほしい。まあ少なくとも京都の方にはそれを申し上げたい。私は京都以外のことはよく知りませんから、言えませんけれども。京都の皆さんはみない人なんです。でも、おとなしい。いや、こんな所で京都の恥をさらして申し訳ないけれども、京都の方に申し訳ないけれども。京都の方々は本当にいい人なんです。でも、いい人で終わったらあかんのや。悪い人でもいいからキリストを告白することです。

「わが名のために誇られるならば、汝らは幸いななり。天国における報いは大い

なり。喜べ、喜べ」

と。キリストのあの山上の垂訓なんて、みなそんな気持ちでしょ。

「私の名のため褒められる」

なんて、どこにも書いてない。それは多分そうだと思うんですよ。当時、イエスという方は宗教家としてまだ確立していなかったと思う。今でこそ、キリスト教の元祖というか、キリストからキリスト教が始まった。キリストは素晴らしいということ、これは相場が決まっていますけれども、当時は、まあ言うならば異端の首みたいなものです。律法学者たちや祭司・宗教家から見たら、イエスなんてのは本当に問題にしないような、そういう存在だったと思いますよ。それのお弟子たちはますますつまらない奴だと、そんなふうに



軽蔑されて見られていたのではないかなと、推測するんです。

まあどちらでもいいですよ。褒められようが、貶されようが、とにかく我々は自分の存在を通して御名をあがめていく。キリストの栄光を顕していく。いや、キリストが栄光を現したもう。そういうことを本当に信じて、大胆にイエス・キリストを告白してほしい。

いずれ、私は向こうへ往きますので、どうしても私の話は遺る人たちに対しての励ましの言葉にならざるを得ない。それからもう一つ、これは誰も決めることができないけれども、私よりは先に逝かないでほしい。それだけはお願ひいたしますよ。私はもうお葬式するのは御免ですわ。今まで何人かの葬りのお手伝いをしてきましたけれども。今度は皆さんが私の葬りをやる番ですからね、そのことも(笑)。向こうへ往くことを嬉しそうに話す人間なんて、そうそうこの世には居らんと思えますけれどもね。ええ、でも、私にとっては、もう向こうはすぐそばなんです。もうフツとそれが来る。そういう気持ちですから。ええ、皆さんはいかがですか？

「まだまだ何十年もある」

と思つて、ノホホンとやっていたらあきませんよ。明日にもわからないですから。まあまあ、脅かすようですみませんけれども。

とにかく、パウロは言いました。

「生くるにも死ぬるにもこの身においてキリストの御名があがめられること。

それが私の願いだ。生くるはキリスト、死ぬるもまた益なり」

と、ピリピ書で言ってます。ああいったパウロの生きざま、これをぜひ皆さんお一人お一人が自分のものとして、告白していただきたいなと思います。

### ●御霊の執り成し

またローマ書8章に戻ります。14節、

「14すべて神の御霊に導かるる者は、これ神の子なり。15汝らは再び懼を懐くために僕たる霊を受けしにあらざ、

奴隷の霊を受けたのではない。

子とせられたる者の霊を受けたり、

神の子とせられたる者の霊を受けたのである。だからこそ、

之によりて我らはアバ父と呼ぶなり。

「アッバー、父よ」と御名を呼ぶことができる。しかも、

16御霊みずから我らの霊とともに我らが神の子たることを証す。

皆さん、素晴らしい存在にされたんです。

17もし子ならば世嗣たらん、神の嗣子にしてキリストと共に世嗣たるなり。

神の子なら天国を受け継ぐ世継ぎである。神の世継ぎであつて、キリストと共に神の国を



受け継ぐ、そういう相続人である。しかも、次に書いてあるのが素晴らしい。  
これはキリストとともに栄光を受けん為に、その苦難をも共に受くるに因る。  
キリストと共に栄光を受ける者は苦難をも受ける。

「栄光だけは受けますけれども、苦難は御免こうむります」  
なんて、そういうわけにはいかん、ワンセットだと。いや、こういうところを読んだら、もうワクワクしますね。そして、次の18節からは深刻なところですよ。

18 われ思うに、今の時の苦難は、  
そうでしょ、世界情勢を見ましても、我々の身近なところを見ましても、いろいろな犯罪がある、公害もある、温暖化現象がある、いろんなところで自然界がゆがんできているように思えますね。北極や南極の氷が融けだしたとか、そういうようなこともありますしね。パウロはここで自然の呻きを聞き取っているんです。

我らの上に頭れんとする栄光にくらぶるに足らず。19 それ造られたる者は、  
これは被造物、人間だけではない、自然万物。

切に慕いて神の子たちの現れんことを待つ。20 造られたるものの虚無に服せ  
しは、己が願によるにあらず、服せしめ給いし者によるなり。

切に慕いて神の子たちが現れてくれるのを待っている。そして今、自然界が虚無に服している、正常な姿ではない。これは自らではなくて、そこにも神の御意がある。

21 然れどなお造られたる者にも滅亡の僕たる状より解かれて、神の子たちの  
栄光の自由に入る望は存れり。

でも、同時に滅びのさまから解かれて、神の子たちの栄光の自由に入る望みは残っていると。だから、パウロは人間だけが救われるとか、人間だけが栄化される、栄光を受けると、そうは思っていない。自然も共にと、そういう気持ちがあるわけです。

22 我らは知る、すべて造られたるもの今に至るまで共に嘆き、ともに苦し  
むことを。23 然のみならず、御霊の初の実をもつ我らも自ら心のうちに嘆き  
て子とせられんこと、即ちおのが体の贖われんことを待つなり。

御霊の実をいただいている私たちだって、やはり、体までが贖われて本当だと。霊だけは天国だけれども、体は病めるままで終わってしまうとか。まあ必ず死ぬんだから、しようがないけれども。しかし、それをここで、この体もまた贖われて栄化される。体もまた栄光の姿に変貌する。それを望んでいる。そういう望みをいただいていることによって、私たちは救われていると言っているようにしよう。

24 我らは望によりて救われたり、眼に見ゆる望は望にあらず、人その見ると  
ころを争でなお望まんや。

これは、

「信仰とは望むところを確信し、見ぬ物を真実とする」



という、第1回と同じことをここで言っているわけです。まだ見ていない。しかしそれを望むということは、もう既に今得たりとして、

「現実には手にしていないけれども、必ずそれをいただきます」と、そう言うて進んで行く。それには忍耐が必要だと。

<sup>25</sup>我等もし其の見ぬところを望まば、忍耐をもて之を待たん。

そして、今までの言ったこと一切、それは御霊の導き、御霊の執り成しがあつてのことだというのが次に出てきます。

<sup>26</sup>斯くのごとく御霊も我らの弱を助けたもう。我らは如何に祈るべきかを知らざれども、御霊みずから言い難き歎(呻き)をもて執成し給う。<sup>27</sup>また人の心を極めたもう者は御霊の念をも知りたもう。御霊は神の御意に適いて聖徒のために執成し給えはなり。」(ロマ8・14~27)

この今の26節からは、私たちが祈る時に非常に大事なところだと思えます。そもそも我々が祈るといふのは、一体どのように祈つていけばいいのかわからないというのが、正直なところですよ。

「病気を癒してください。御飯を食べられるようにしてください。職業生活でいろんなことがうまくいきますように」

と。そういうのは願望ですよ。祈りではないと思えます。本当の祈りというのは、「神さまのご本願がこの身において成つてくださいますように。御意が天に成るごとく、私において地にも成りますように。私をあなたさまに献げていきますから、どうぞ、あなたが私を捕まえて、お用いになって、あなたの栄光を顕してください」これが私は祈りだと思えます。そういう祈りを御霊が助けてくださるといふ。どう祈つていいかわからない。けれども、

「御霊自らが言い難い呻きをもつて執り成してください。その御霊の思いをちゃんと天にいらつしやるキリスト、また父なる神さまは御存知である。御霊の思いを知り給う。御霊は神の御意にかなつて、我々のために執り成してください」といふことです。

## ●財産において自我を惜しむ

小池先生はしよつちゆう、

「御霊ほどありがたいものはないさ」

ということを本当に仰っていました。それだけ小池先生は御霊、聖霊の事態を体で感じておられたと思います。まあ小池先生にもいろんな欠陥があつたでしょう、問題もあつたでしょう。それをご存知なるがゆえに、

「人間小池を見るな、御霊の小池を見てくれ」



というようなことを仰っていた。だから、人間はそれ自体としてあらゆる面で完璧なんて、これは不可能ですよ。それを整えたら、偽善者になります。まあそう言って開き直っていいわけでもありませんけれども。いいわけでもないけれども、やはりそこには平伏しというものが——さっきの詩篇にもありました——

「誰もあなたの前には立てません。しかし、あなたには赦しがありますから、だから、本当に我々は助かるんです」

ということが歌われていますように我々はどこまでも平伏しの姿です。全く生の姿では、  
「義人なし、一人だになし」

です。みなエゴイストです。けれども、そういうエゴを十字架で片づけてしまってください。ついでに申しあげておきたいのは、キリストが、「こうしなさい」という御言がありますね。あるいは「あなた方はこうだ」という御言がある。たとえば、

「あなた方は世の光なり。あなた方は地の塩である」

と。そういう御言がある。あるいは、

「天の父の全きがごとく、あなた方も全き姿であれよ」

とありますね。そういうときに、

「私がそうしてあげるから、大丈夫だよ。私がお前をそのようにするから、安心しろ。

私に付いて来なさい。私に任せなさい」

と、そういう御声が背後に響いているということをお話がありますね。でないと、キリストの「あれをせよ、これをせよ」というのをまともに受けとったら、やる気が出ないくらい厳しいですよ。だから、富める青年はキリストのところへ来て、

「私は小さいときから誠命は全部守ってきました」

と言ったら、

「あなたの全財産を売り払って、人々に施して、そして私の弟子として従って

きなさい」

と言われた。彼はかなり悲壮な顔して去って行ったというお話がありますね。小池先生はあそこをどう言っておられるか。

「彼は財産において自分を惜しんでいる。キリストは、なにがなんでも財産を棄てて付いて来いとは仰っていない。財産において自我を惜しんでいる。そこをキリス

トはズバリと指摘された」

と。だからもしも、あの青年が、

「はい、悪うございました。私は御言を成就するような、御言を全部守ってきました。たなんて申し上げましたけれども、とんでもありません。私はそんな人間ではありません。あなたの御前には、私は罪びとそのものです」



と言って、そこで平伏したら、きつと、

「ああ、それでいいんだよ。誰も自分を棄てられるような人間はこの世にいない。安心して私に付いて来なさい。自我を棄てる、それは私がさせてあげるから大丈夫だよ」

と。そういうふうを受けとらないと。

### ●無者キリスト

明治の頃に日本の知識人は非常に聖書にかじりついたそうなんです。正宗白鳥とか、有島武郎とか、そんな方々の名前を聞きました。けれども、みんな躓いたんです。それは、自分の力でキリストの「山上の垂訓」を実行しないといけないと、こう受けとったからです。私が好きな人で亀井勝一郎という方がおりました。その方は始めはキリスト教徒らしかったけれども、やがてそれを捨てて、親鸞の方に行った。それはやっぱりキリストの「山上の垂訓」を自分の力でやらなければいかんと、そう思いこんだから。「山上の垂訓」を自分の力でやれるような人は、キリスト以外に誰もいませんよ。しかも、キリストですら、

「私は空っぽだ。私はゼロだ」と言っただしょ。

「空っぽな私の中に神さまが100%宿っておられる。その神さまがいろんなことをせよ、しゃべれと仰っているから、その通りやっているだけで、自分はロボットに過ぎないんだよ」

ということを言われた。だから小池先生は、

「無者キリスト」

と言われた。キリストは立派な方ではなかった。自分は「ゼロ」なんだと。「ゼロ」なるキリストに神さまという「100」が宿った。だから、

「0=∞」（ゼロ=無限大）

という、そういう数式を発表されたわけです。だから、キリストの言葉がどんなに厳しいものであっても、

「主さま、私には無理です。どうぞ、お赦してください。本当のお弟子にしてください」と言っつて、キリストにすがりつけば、それでよろしいんです。それを自分の力でやろうと思うところに躓きがある。躓いたら、

「躓きましたから、救い上げてください！」

と言えはいいのに、それも言わない。それで悲しみつつ立ち去って行く。どうもそういうことのようなんですね。

日本の明治以来、非常に真面目な知識人が聖書と取っ組んだらしい。けれども、みんな躓いた。というのは、そういうところで、自分で何でもやらねばいかんと、そんなふう



思いこんで、そしてやれない。そこでみんなキリスト教を棄てていったと。そういうふうには私はいかがつてきました。明治期に随分そういったキリスト教が入ってきて、広がっていったらしいんですけども、それが続かなかつたのは、そんなところにどうも原因がありそうですね。

それからもう一つは、凄く祈りに燃えた集会在日本に三つほどあったらしい。その祈りに燃えたところが、そのあとが続かなかつた。むしろ変な方向へ行ったりした。そこで、祈りとかそういう熱狂的な信仰は危ない。もつと理性的な信仰でなければいけないということ、いわゆる観念的な、理念的なキリスト教に変わって行った、というふうにもうかがっています。だから小池先生は、

「観念に非ず、御利益に非ず、パリサイに非ず、靈的傲慢に非ず」

と、「四つの非ず」が大事と言われて、「靈的傲慢」「観念」などの四つを退けられたことがあります。

〔註：1960年8月19日「狭き門」(マタイ7・1〜23) 夏期福音特別集会(伊香保) 第1回 集会の聖書講筈の中で「四つの非ず」に言及している。(「キリスト告白録」第4巻『狭き門』に収録)〕

### ● 破れ・砕け・平伏

そういうことで、細い道、狭き門を通らせられるんです。しかし、それは己が力で、己が義をもってやろうとすると、そういうことになる。小池先生はいつも「平伏し」の心といることを仰った。それからもう一つ、小池先生が仰った言葉で、私に非常に印象に残っているのは、

「奥田君、破れだよ、みんな立派すぎるんだよ、破れなければいかんよ」と。つまり、

「いい恰好するな。ありのままの自分の姿を投げ出せ。キリストの前に自分を投げ出せ。そうしたら、キリストは抱き取<sup>いだ</sup>って、破れを繕って、弟子のあなたに作り変えてくださるのだから。ところが、みんな破れない。いい恰好しようと思って、自分を護ろうとする。そうすると、キリストは入って来れないんだよ」

と、そんなことを言われたと思います。まあ何といても、私はやっぱり小池先生のいろんな機会に仰ったことが頭の中に残っている。本当にありがたいことでした。

「破れだよ」と。それから「砕けだよ」と。破れ、砕け。そして、小池先生が1965年(5月29〜30日)に京都教育文化センターを拠点にして3回の講演をなさった。第1回目の集会是「無条件降伏」。第2回目の集会是三高会館を会場にして、「中央突破」。第3回目は「決定的勝利」。無条件降伏、中央突破、決定的勝利という段階を経て、我々は靈的に新しく生み出され、そして成長させられていくということを強調されたのだと思います。



人間はどうしても整えたくなくなるでしょ。いい恰好をしたくなる。それに対して先生は、  
「破れだよ、砕けだよ」

と仰った。どうぞ、皆さんも、いい恰好しようなんて思わないで、破れだよ、砕けだよと。破れた姿、砕けた姿。平伏のところに聖霊が降りたもう。そして、聖霊は十字架をお示しになるんです。

「われ主と共に十字架せられたり、もはやわれ生くるにあらず。復活のキリスト、御霊のキリスト、わがうちに生きたもうなり」

という、そういう姿を示してくれる。そして、絶対にいけないのは霊的傲慢です。

「俺はいろんなことがわかった。大したもんだ」

なんて霊的傲慢になると、サタンが喜ぶ。それを先生は否定した。そして「平伏しの姿」ということを仰った。まあ私は一番永い間、先生に接してきて、先生のいい面を一番よく知っていますので、それをやはり私が証言者として、皆さまにお伝えする必要があると思つて、時々、そういうことを申し上げるんです。何といつてもやはり、『無者キリスト』(小池辰雄著作集第1巻)は素晴らしい本ですから、あれをどうぞよくお読みになつて、また吸収していつていただければと思います。

ローマ書8章の最後のところにいきましよう。

「<sup>31</sup>然れば此等の事につきて何をか言わん、神もし我らの味方ならば、誰か我らに敵せんや。<sup>32</sup>己の御子を惜まずして我ら衆のために付し給いし者は、などか之にそえて万物を我らに賜わざらんや。」

キリストをいただくだけでも大変な恵みなのに、そこに「万物をそえて与える」。なんとありがたいことかと、そういうことを言ってます。それから、決して我々は断罪されることではないと。

<sup>33</sup>誰か神の選び給える者を訴えん、神は之を義とし給う。<sup>34</sup>誰か之を罪に定めん、死にて甦えり給いしキリスト・イエスは神の右に在して、我らの為に執成し給うなり。

あのご復活されたキリストが我々のために執り成してくださっているからである。このキリストの愛から私たちを引き離すものは絶対、天上天下どこにもありえない、ということがこの以下のところに書いてあるわけです。

<sup>35</sup>我等をキリストの愛より離れしむる者は誰ぞ、<sup>36</sup>患難か、<sup>37</sup>苦難か、<sup>38</sup>迫害か、<sup>39</sup>飢か、<sup>40</sup>裸か、<sup>41</sup>危険か、<sup>42</sup>剣か。<sup>43</sup>録して『汝のために我らは、<sup>44</sup>終日、<sup>45</sup>殺されて屠らるべき羊の如きものと為られたり』とあるが如し。<sup>46</sup>されど凡てこれら<sup>47</sup>の事の中にありても、我らを愛したもう者に頼り、<sup>48</sup>勝ち得て余あり。<sup>49</sup>われ<sup>50</sup>確く信ず、<sup>51</sup>死も生命も、

これは地上の死とか地上の生命とか、そういう死も生命も、あるいは霊的な、



御使も、権威ある者も、今ある者も後あらん者も、力ある者も、<sup>39</sup>高きも深きも、此の他の造られたるものも、

いろんな霊的存在者も、今あるだけではない、これから現れてくるような霊的存在者もいるだろう。いろんな段階のいろんな霊があるだろう。どのようなものが来ても、

我らの主キリスト・イエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざることを。」(ロマ8・31～39)

我らの主キリスト・イエスにある神の愛が私たちを捕まえて離さないんだと。この神の愛の力、

「キリストにおいて顕れた愛の力、永遠の生命の力、これに絶対につかまれて突き進んでくださいね」

という、そういう励ましがここにあると思います。

### ●誠と信

それから、マタイ伝7章7～11節「求めよ、さらば与えられん」。

それから次は、マタイ伝21章21～22節。これは

「祈りたることは既に与えられたりとせよ」

という箇所だっただけだと思います。その前に無花果の木が枯れた。キリストが呪われた為に枯れてしまった。それをお弟子さんが翌日見て、

「あつ、先生、あなたが呪われた無花果が枯れていますよ」

と。まあ、無花果こそ迷惑な話だと思えますけれども。その季節でもないのに、ということでは少々憤慨したんですけれども。しかし、イエスはそういう無花果のことを引き合いにしながら、本当に信仰というのは、

「此の山に『移りて海に入れ』と言うとも亦成るべし。」

と。「本当に信じて祈るならば、命じるならば、そのようになるよ」と。これも目茶苦茶な話ですよ。大事なことは、

「<sup>22</sup>かつ祈るとき何にても信じて求めば、ことごとく得べし」(マタイ21・22)と。これですよ。信じて求める。

「それ信仰は望むところを確信し、見ぬ物を真実とするなり」(ヘブル11・1)

と言いました。だから、イエスがラザロを甦えらせた時もそうだったということを第1回で言いました。ラザロは墓に葬られて四日も経っている。しかし、イエスが祈られた。

「あなたは、私がどんなことを祈っても、必ず聞いてくださるということを書いておきます。だから、どうぞ、祈りに応えてラザロを生き返らせてください」

と言って祈って、そして、

「ラザロよ、出て来い！」



と言われたら、ラザロが出てきたとありますね。ああいう姿。そんな墓に葬られて四日も経っているものを、「出て来い!」と言ったら、出てくるなんて誰も信じることはできない目茶苦茶な話ですよ。けれども、イエスにおいては、それはちゃんともう霊視しておられるのではないかと思う。ラザロが甦つてくる姿を先に示されて、そして、人々にそのことを証<sup>あかし</sup>するために、あのように祈られたのではないかなと、私は推測するんです。そのように、ここで

「祈りのとき何にても信じて求めば、ことごとく得べし」

と言う。我々は、「天国に入る」ということもそうですね。まだ現には天国に入っていないけれども、もう必ず天国に入れていただけると、私は信じて疑っていません。ええ。それはキリストがちゃんと道を開いてくださったから。

「我は道なり、真理<sup>まこと</sup>なり、生命<sup>いのち</sup>なり。誰でも私によらなければ、父の御許<sup>みもと</sup>に、

天国へ往けない。しかし、私を通るならば、誰でも往ける」

「はい、ありがとうございます。私はあなたのお弟子にさせていただきました。だから、

私はこの世を去れば、必ずあなたの御許に、キリストのいらっしやる霊界の天国

へ必ず参ります。ありがとうございます!」

と。皆さんも同じでしょ。分け隔てはなさいませんよ。大事なことは「幼児<sup>おさなご</sup>の魂」です。疑わないことですよ。自分を信じているのではない。キリストの言葉を信じているんです。

「キリストの仰ったことは必ずその通り成る」

と、こう信じているんです。「信ずる」とはそういうことではないでしょうか。誰かが人を信ずるといふことは、その相手の方が仰ったこと、それが必ずその通り成ると、そう信じて、それを前提にして生活するということが、「信ずる」ということだと思っんです。

また、語り手もそうです。語ったことは必ず成らなければおかしいんですよ。「言」偏に「成」と書いて、「誠」という。だから、誠<sup>まこと</sup>の人というのは、その方の語っていることと、それから現実、将来の姿、これがピタツと一つであるというのが「誠」なる人の姿です。それから、「信仰」の「信」というのは、「人」と「言」がくっついている。「人」偏に「言」でしょ。だから、その人と言とはピタリ一つ。単なるほら吹きではない、詐欺師ではない、嘘つきではないと。言っていることは必ずそう成る。今すぐ成るとは限らない。でも必ず成る。これが人偏に言、「信」です。だから、

「漢字というのはいくよく出来ている」

と、よく小池先生は仰いました。本当によく出来ています。人と言とがピタツと一致している人は信ずるに価する。言と成る、その言の通りのが成る人は誠なる人である、信頼していい人だと。まあそういうことで、我々は御霊のキリストがそのような人間へと創り変えていってくださいます。

クリスチャンは変化していくんですよ。出だしはわるくても、あとで素晴らしいものに



変貌していくんです。「醜いアヒルの子」とかいうお話がありますね。最後に白鳥となって羽ばたくという。だから、我々がキリストに出会った時は、たとえどんなに濡れで醜くてガタガタであろうと、キリストにつかまれて段々変貌して、最後は素晴らしい姿になって、あのキリストのご復活の栄光の姿に栄化されて、天に迎えられていく。これが私のイメージなんです。皆さんも、

「将来は素晴らしいですよ。今はどんなに苦しくても、将来は素晴らしい。夜がどんなに続いて、必ず朝が来るんですよ」と。そういう希望を確信として与えていただけ。これが我々の伝えている信仰ですよ。

### ●御意にかなう求めは必ず聴き給う

それから最後に、ヨハネの第一の手紙5章の14〜15節を見ましょう。このヨハネの第一の手紙は全部が素晴らしい。けれども今は、全部は見ることはできませんので、ここに引いてある5章14〜15節だけを取り上げます。11節から見ましょう。

「11その証はこれなり、神は永遠の生命を我らに賜えり、この生命はその子にあり。12御子をもつ者は生命をもち、神の子をもたぬ者は生命をもたず。

皆さんは御子をいただいているのだから、もう永遠の生命をいただいております。

### 13 われ神の子の名を信ずる

つまりキリストですね。イエス・キリストを信ずるあなた方に、

汝らに此等のことを書き贈るは、汝らに自ら永遠の生命を有つことを知らしめん為なり。

あなた方にこれらのことを書き贈ってきたのは、あなた方がもう既に永遠の生命を持っていることを知ってほしいからなのだ。永遠の生命は目に見えないですから。でも、あなた方の中にはもう永遠の生命が宿っている、そのことを是非ともしつかりと受けとってほしいと。

14 我らが神に向いて確信する所は是なり、即ち御意にかなう事を求めば、必ず聴き給う。

御意にかなわないとダメですけども、御意にかなうことを求めていくなら、必ず聴きたもう。そしてそのように、

15 かく求むるところ、何事にても聴き給うと知れば、求めし願を得たる事を

も知るなり。」(ヨハネ15・11〜15)

求めるところは必ず聴き給うということを知っているならば、求めた時点でもう既に得たりと、そのように信じていける。

「望むところを確信し、見ぬ物を真実とするなり」(ヘブル11・1)

という姿がここに出ているではありませんか。御意にかなうことを求めるならば、必ず聴



いていただける。このように、必ず聴いていただけるということがわかれば、もう求めた時点で、

「はい、もういただきました。ありがとうございます」

と、そういうふうにして、将来実現することを現在先取りして喜んで生きていく。

「あなたには3億円の宝くじが当たります」

と。これが本当なら、

「ありがとう。もう、3億円もらったものとして、これから豪華な生活をいたします」

なんて(笑)、そんなことではありませぬけれどもね、まあまあそのくらいの、それを前提にして生きていくということ。この世の生活は実現してから初めて歩き出すんです。でも、我々は実現していないものを既に得たりとして、それを前提にして歩いていく。だいぶ違いますよね。これは我々クリスチャンの特権ですよ。

御言は必ず成る。祈って願ったことは必ず聴いていただける。身勝手な祈りはダメでしょうけれども、御言に基づき、御約束に基づいて祈ったことは必ず聴いていただける。そのようにして、いわば霊的空間というかな、生活空間が広がっていくように思いますね。たとえ小さな窮屈な家に住んでいても、大きな御殿に住んでいるような、こうだい鴻大なる気持ちで生きてゆく。まあ例えて言うなら、そんなことかも知れません。

だから、我々はキリストによつて非常に大きな望みをいただいている。

「みこ御子をもつものは一切をもつ」

という言葉があります。本当に御子キリストをいただいているということは、どんなに凄<sup>い</sup>恵みであるか。そのことを、どうぞ皆さん、日々の生活を通して味わっていつて、またご証言いただきたいと思えます。そのことが、

14 **我らが神に向いて確信する所は是なり、即ち御意みこころにかなう事を求めば、必ず聴き給う。**

「必ず聴き給う」ということを知っているなら、願った瞬間にもう「聴かれたり」ということになる。

「望みたることは既に聴かれたりとせよ」

と、そういうことがここにちゃんと書かれているわけです。

まあこういうことで、私たちは祈りの生活というのは非常に豊かです。決して窮屈ではない。末広がりなんです。そういうことを私たちは生活を通して体験していく。やはり体験していくことが非常に大事なことです。そして、そのことをまた証していく。そういうことでありたいと願っております。

それでは、私の方のお話はそのくらいにして、祈りを捧げていきたいと思えます。私が指名いたしましたら、その方は大声で祈っていただきたい。他の皆さんも祈りに合わせる事ができるように、そのようにお願ひしたいと思います。始めに私が祈りを捧げます。



## ● 祈り

しばらく黙祷をお願いいたします。

主さま、ありがとうございます。あなたの与えてくださった御霊みたまの世界は、夜も昼のごとく輝いています。実に豊かな豊かな生命の世界でございます。たとえどんな冷たい所でも、寒い所でも、また暗い夜でありましょうとも、あなたの光は陽の光のごとく、昼間のごとく輝いて、我々の心を照らしてくださいませ。パウロは、

「**為せん方せつくれども望みを失わず、倒されども亡なびず**」

と、そのようにして盛んなる生命を実証してくださいませ。どうか、私たちも、「この死からだの体」とパウロが嘆いた「死の体」でありながら、御霊のゆえに、この死ぬべき肉体をもあなたは活かしめて、あなたの栄光の器として我々一人びとりを御名のゆえにお用いくださることを感謝いたします。

「**汝ら我を選びしにあらず。われ汝らを選びたり。往きて果を結び、かつその果の残らんために汝らを立てたり。汝ら、互いに相愛せよ**」

と、愛の律法おきてを残してくださいませ。主さま、

「**御霊のあるところには自由あり**」

と、また書かれてあります。八方塞がりでも、どこを見ても、希望のないような世界でありましょうとも、あなたから希望の光が射し込んで参ります。

「**我は道なり、真理なり、生命なり。この道を往け**」

と、あなたはご自分が道となってくださいませ。そして、十字架で我々を贖いきつて、「見よ、あなた方は既に神の子である。御霊をいただいた神の子であるぞ」と。正にパウロが、

「**われ主と共に十字架せられたり。もはやわれ生くるにあらず、御霊のキリス**

**ト、復活のキリストさまが、この新しく生まれ変わらしていただいた私の中に豊かに豊かに生きてありたもうなり**」

と。そのように凱歌をあげながら、御名を讃えつつ進んで行きとうございます。

また、主は、

「**汝ら互いに相愛あいせよ。人その友のために己が生命を棄つる、これより大いなる愛はなし**」

と仰いました。どうか、主さま、私たちは家庭において、また隣人において、社会において、いろんなところでああなたの心を心として生き、愛をもって貫くことができるような、そういう存在者であらしめてください。それには日々の祈りが大事です。御言によって霊性が養われていくことが大事です。

「**人を活かすものは霊であつて、肉は役立たない。私が語った言葉は霊であり、生命である**」



と、あなたは言ってくださいました。また、

「我を食らい、我を飲め」

と。あなたご自身が生命となつて、私たちの所に宿ってください、天界から降ってください、

「汝と我とは一つなり」

と、そう言つて、抱きしめてくださる。どうぞ、御霊の主さまがこの兄弟姉妹の中に宿りたまひ、働きたまひ、日々、御霊の主さまと一緒に歩いて行くことができますように。また、周りの人々を救い上げ、助け上げていくことができますように。どうか、どんな時にも御名を讃えつつ、讃美しつつ、歩んで行くことができますように、御助けくださるようお願いいたします。

主さま、どうぞ、この会場にいらつしやる一人ひとりを今、抱きしめてください。今、御霊をもつて包んで、御霊となつて宿ってください。主さま、お願いいたします。祈りの火を燃やしてください。主さま、御霊の炎をもつてこの会場を燃やしてくださいませようにお願いします。主さま、あなたが私たちの望みであります。主さま、どうぞお願いいたします。一人ひとりの中にあなたが豊かに宿り、

「我は道なり、真理なり、生命なり。我によらずば、誰にても父の御許に、聖国に入ることとはできない。しかし、私に居るならば、誰でも無条件に聖国に入つて往けるよ。汝と我とは一つなり」

と、あなたの方から道となつてくださいました。贖いをなしてくださいました。すべてあなたがなしてくださいました。そして、

「汝ら我を選びしにあらず、われ汝らを選びたり」

と、そこまで仰つてくださっています。どうか、ここに集つているお一人お一人、誰も漏れることなく、本当にあなたの証人、器とせられて、御霊を宿し、御霊の火に燃えて、日々を過ごすことができるように、どうぞ今、聖霊のバプテスマを降してくださいませようにお願いいたします。

この感謝と讃美と祈り、尊き主イエス・キリストの御名を通して、御前にお捧げいたします。アーメン。

